

平成 21 年 3 月 23 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19520580

研究課題名（和文） 遣唐使の特質と平安中・後期の日中関係に関する文献学的研究

研究課題名（英文） A study on the characteristics of the Japanese envoys to Tang China and the historical records concerning to the relationship between Japan and China in the middle and latter part of Heian period

研究代表者 森 公章（MORI KIMIYUKI）

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：30202360

研究成果の概要：本研究では遣唐使の特質を唐文化移入のあり方や入唐後の動向を通じて検討し、その成果は既発表論文とともに著書『遣唐使と古代日本の対外政策』（吉川弘文館）として上梓することができた。また平安中・後期の日中関係を解明する材料として入宋僧成尋の『参天台五臺山記』の校訂本作りと記事の分析を進めるとともに、成尋に至る入宋僧の系譜を考究して論文化し、これらの成果を報告書の形で刊行することで、広く学界共有の研究基盤を呈することに貢献したものと考える。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：遣唐使、成尋、参天台五臺山記、唐文化の移入、入宋僧、日唐関係、古代日本の対外政策

1. 研究開始当初の背景

古代の日中関係は遣唐使のイメージが強く、遣唐使廃止によって「国風」文化が形成されるという誤ったイメージがあるが、実は遣唐使以後の方が日中関係は頻繁化・日常交流化する。遣唐使の特質を明らかにするとともに、研究が不足する遣唐使以後の平安中・後期の日中関係の様相を解明する研鑽を行いたいと考えた。遣唐使に関しては、拙著『古

代日本の対外認識と通交』（吉川弘文館、1998年）で日本の対唐外交が対等関係を要求するものではなく、朝貢外交を認識しており、不携行とされる国書の携行していた可能性が高いことなどを指摘しており、日唐関係の実相をさらに考究すべきと考えていた。その後、遣唐使以後の日中関係の展開を検討する課程で、その前提となる遣唐使の諸相についても個別研究を進めてきた。その中では日本の

遣唐使は見た唐の賓礼、唐側の日本に対する意識の検討を行い、また遣唐使事業を全体として解明する視点の下に、遣唐使の時期区分や大宝遣唐使の画期性の究明、最後の遣唐使計画となる寛平遣唐使のあり方などを考察している。こうした研究をふまえて、今回の研究では遣唐使の諸相をさらに探求するとともに、遣唐使事業終了以後、五代十国、宋代の日中関係の具体相を考察し、遣唐使を含めて、古代の日中関係を総体的・通時的に解明する必要性を強く意識した次第である。

2. 研究の目的

遣唐使に関する従来の通説には近年大きな見直しの研究が蓄積されており、そうした研究をふまえて、遣唐使の特質について再検討を行う。遣唐使の研究については、平安時代の延暦度・承和度、そして寛平度の遣使については、それぞれの時期の東アジアの国際関係をふまえた基礎的研究の余地も残されていると考える。上述のような本研究課題による申請に至る過程で、個別の遣唐使事業の分析、遣唐使事業全体の時期区分や大宝以前7世紀の東アジア情勢、また新羅・渤海など朝鮮諸国との通交にも考察を加えており、それをふまえて、遣唐使が何を目的に唐と通交したのか、唐文化移入のあり方はどうだったのか、9世紀の遣唐使事業の具体相は如何であったのかなど、平安時代の遣唐使に関する基礎的考察を行いたいと思った。

さらにはまた平安中・後期の日中関係を解明する材料として、入宋僧成尋の『参天台五臺山記』8巻があり、これはE・O・ライシャワー氏が世界3大旅行記と評した承和度遣唐使の請益僧円仁の『入唐求法巡礼行記』4巻に匹敵する優れた史料であると思われるが、その内容はまだ十分に解明されていないと言える。その理由の1つとして、良質の定本がないことが挙げられ、本研究では校訂本の一案を呈すべく、最善本と言われる東福寺本の読み起し本を作成したいと考えた。いくつかある写本系統のうちでは、現在では失われた内閣文庫本の系統に属する現存唯一の写本である長崎県平戸市の松浦史料博物館所蔵本は写真撮影すら行われていないので、この孤本の価値を共有し、斯界の便宜を図るためにもその写真撮影や調査実施が望まれるが、写真撮影は公的機関が行うべきものと思われ、今回は個人的な写本調査を進めることになった。こうした写本の比較・検討の上に立って、東福寺本の価値の高さが改めて認識されることになるので、東福寺本を底本とした校訂案を呈することが意義のあることだと考え、本研究では東福寺本の読み起しと訓点付けを行ったものを斯世共有の考察材料として提示したいと計画した。

その他、合せて遣唐使以後、成尋に至る渡

海僧の史料整理、朝鮮諸国との通交の様相を解明することも目的としたい。ここでは成尋の先駆者としての、寛建、日延などの五代十国への渡海僧、そして成尋入宋以前に宋に渡航した入宋僧などの史料を収集し、各人の動向、成尋の活動との対照が課題になり、『参天台五臺山記』に描かれた成尋の活動を理解する補助手段としたい。

また10世紀以降の朝鮮諸国、高麗の動向も重要であり、日麗関係の展開やその特質にも留意する必要があると考える。宋は契丹と敵対しており、その契丹との通交していた高麗は、ある時期まで宋との通交が規制されており、成尋が入宋する頃は丁度この規制が緩和される時期であったので、日麗関係の展開を考える上でも、朝鮮諸国の動向には十分に目配りをするのが求められると思う。この同時期の朝鮮諸国との関係解明も課題の1つである。

3. 研究の方法

(1)入唐・入宋僧の渡航記録の集成を行い、成尋に至る渡海者の系譜を明らかにする。特に実質上最後の遣唐使渡海になった承和度遣唐使以後の入唐者として、円珍や真如親王、10世紀以降、五代十国の後唐や呉越に亘った興福寺の寛建、延暦寺の日延など、遣唐使と入宋僧の間をつなぐ存在にも着目して、彼らに関係する資料を収集し、その足跡をまとめる。さらに成尋に至る入宋僧の系譜を探るために、各人の関係史料の悉皆収集に努め、成尋の宋での行動と比較・対照して考察することが可能か形で整理を行いたい。

(2)遣唐使の特質の整理および遣唐使以後の東アジアの国際関係の研究に努め、日中関係の特性を理解する。本研究申請の前段階で考察を行った大宝遣唐使以後の遣唐使事業について、個別事例の考究、唐文化移入の特質、平安時代の遣唐使のあり方などをさらに探求したい。近年は遣唐使の全員が唐の都長安に行ったのではなく、多くの人々は遣唐使船到着地である江南の地に滞在しており、長江以南の江南の文化が伝わったという側面も重視されており、唐文化移入の実相を解明することが必要であると思われる。また遣唐使は20年に1度くらいの遣使であるから、唐のすべての時代の文化を同時代的に移入したのではないし、当初から師事すべき人物に目途があって渡海する訳でもなかったという特性も判明した。こうした特質をふまえて、同じ時期に頻繁に遣唐使を送った新羅との比較なども行いながら、日本における唐文化、さらには外来文化移入の特色をまとめてみたい。また延暦度、承和度遣唐使の派遣をめぐる東アジア国際情勢のあり方と遣唐使事業の行方、遣唐使から入唐求法僧・入宋巡礼僧への変化を惹起した要因を探ることも

図りたい。

(3)『參天台五臺山記』東福寺本の釈読と諸本の校合を行い、研究の基盤となる校訂本(案)を作成する。上述のように、遣唐使事業以降の日中関係の具体相を探る史料として、『參天台五臺山記』の読解が期待される。しかし、決定的な定本がないことは研究を促進するだけの障害要因であり、本研究ではいくつかある写本を参照しながら、最善本である東福寺本の読み起こしと訓点付けを行い、斯界に共有できる校訂本(案)を呈示することを目的とする。そのために写本所蔵機関への出張と実見、写真版入手が可能な場合はその入手に努め、別途作成する報告書にその成果を掲載したい。

(4)古代東アジアの国際関係を支えた通交の場や関係史料に登場する国内の関連地域の巡見、また史料の写本閲覧のために、適宜国内出張を行い、場の認識や原物との対話に努める。成尋の足跡に関連しては、京都の関連寺院を探るとともに、彼が入宋のために九州に下向する前にしばらく滞在した備中国新山の地の解明も興味深い。ここには「西の叡山」と言われる山岳修行の場があり、成尋滞在地の正確な場所はまだ確定していないが、近辺の発掘調査報告書入手や現地の踏査を行い、新山別所のあり方を理解したいと思う。

4. 研究成果

(1)成尋に至る渡海者の系譜に関しては、史料収集・検討の成果を国際シンポジウムにおいて国内外の研究者に報告する機会を得、また別途作成した報告書に論文として掲載することができた。そこでは五代十国に渡航した10世紀前半の寛建、10世紀後半の日延の事績をまとめ、当時政治の主流に躍り出てきた撰闋家による支援、撰闋家による外交権の行使の様相が見られることを指摘し、日中関係の上からも日本史の1つの流れを傍証する知見を示している。入宋僧に関しては、成尋以前の2人と、成尋の渡海を手本に入宋し、『渡宋記』という入宋記録を残した戒覚という人物について史料収集と考察を行い、成尋の渡海、宋での行動、宋側の扱いや関心の所在などを比較し、成尋を軸に遣唐使以後の入唐求法僧・入宋巡礼僧のあり方を総体的に検討する視点を示すことができたものと考えられる。

(2)遣唐使の特質に関しては、研究期間中に発表した雑誌論文や発表準備を進めていた論考を含めて、既発表の関連論文とともに、著書『遣唐使と古代日本の対外政策』(吉川弘文館)を刊行し、従来の遣唐使研究に対して自分なりの知見を呈することができた。下記の雑誌論文発表のもの以外に、本研究期間中に進めた成果をもとに、「七世紀の国際関

係と律令体制の導入」、「漂流、遭難、唐の国情変化と遣唐使事業の行方」、「承和度の遣唐使と九世紀の対外政策」という新稿も掲載することができ、延暦度・承和度の遣唐使について知見を深化するという課題を果たすことができたと思う。雑誌発表論文「遣唐使と唐文化の移入」も本書に所収したが、そこでは唐文化移入のあり方として、時間的・地域的制約、偶然性・僥倖性への依存といったマイナス要因がある一方で、自由で自主的な文化摂取が可能であった点や選択性、自国の必要とするレベルのもの習得、そして国内での伝習・定着体制作りといった日本史の特性を明らかにすることができたと考えている。なお、その他、10世紀以降の日麗関係に関する考察も行い、これも雑誌論文として発表することができた。

(3)『參天台五臺山記』については、日々の記事内容を要約した「日々要略」を作成し、東福寺本の読み起こしと諸本との校合による校訂本(案)とともに、別途作成した報告書に掲載することで、学界に共有できる研究基盤を提供することができたと考える。「日々要略」は『參天台五臺山記』の日々の記事を要約するとともに、成尋の行程をいくつかに区分し、会見した人物、滞在した寺院の様子、日常的な交流のあり方などを一覧できるように工夫を凝らしたものである。入宋僧の渡海の方法、宋への入国手続き、宋国内での移動の様子、宋皇帝の賓待、日本人の宋の文物に対する関心の所在、宋仏教の実情、宋朝廷の動向、朝廷における祈雨行事、弟子たちとの交わりなど、当該期の様々な問題を考察する上で、『參天台五臺山記』が如何に優れた史料であるかを示すことができたと思う。また校訂本(案)は従来類似の作業では完全には訓点が施されていなかった宋の文書も含めて、すべての箇所訓点を付けた形になっており、活字本の限界はあるが、できるだけ東福寺本の字配りなどを把握できるようにしているので、東福寺本を基本とする研究の進展に寄与できるものと考えている。

(4)場の実見に関しては、成尋が入宋に備えて九州に下向する前に、一時滞在した備中国の新山別所について、考古学的研究成果の確認と現状理解のための踏査を行うことができた。当地には7世紀の古代山城「鬼城」があり、ここにも山岳仏教の痕跡が存在しているので、岩石が点在する修行の場・岩屋寺や新山の比定地などと合わせて踏査を行った。考古学的発掘も一部には行われており、現地において報告書の入手や複写にも努めたが、「西の叡山」と称される山岳仏教の場はまだ未解明の点が多く、今回の踏査でも十分な解明はできなかった部分が多い。しかしながら、僧侶の渡海の動機を理解する上で、今後こうした宗教的側面も検討していくべきである

との新たな課題に触発された意味で、意義があったと思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

- 森公章「遣唐使と唐文化の移入」白山史学、査読有、44号、2008、31-61
- 森公章「古代日麗関係の形成と展開」海南史学、査読有、46号、2008、1-23

〔学会発表〕(計 1 件)

森公章「入宋僧成尋とその系譜」国際学術シンポジウム「10-14世紀東アジアの外交交流史料」、2008年9月20日、高知大学附属図書館メディアホール

〔図書〕(計 1 件)

森公章、吉川弘文館、『遣唐使と古代日本の対外政策』、2008、326頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

6. 研究組織

(1)研究代表者

森 公章 (MORI KIMIYUKI)
東洋大学・文学部・教授
研究者番号：30202360

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし